

「クリスチャンらしいって何？」

エペソ人への手紙 1 : 3

July.25.2021

エペソ人への手紙 1 : 3 (パウロ)

Preface

先週は、このエペソ書 1 : 3 から「私たちキリストにある聖徒たちは、この世にあつては旅人であり、寄留者である」ということを学びました。

そして今日は、同じエペソ 1 : 3 から、天上にあるすべての霊的祝福を受けると、どういうことが私たちの内に起こるのかということを考えてみたいと思います。

今日の説教題は、「クリスチャンらしいって何？」と付けましたが、私たちキリスト者誰もが、面食らうと言いましょうか、戸惑うことがあります。

それは、イエス・キリストを我が救い主と信じ救われクリスチャンになったら、何かが大きく変わるんだろう思っていたけれども、特段、その人格や品性において大きな変化が起こっていないということです。

クリスチャンならば、誰もが一度は人から言われたことがあるか、自ら問いかける言葉があります。

それは、「それでも、あなたクリスチャン？」もしくは、「それでも、僕は、私はクリスチャンなのか？」という言葉です。

つまり、「天上にあるすべての霊的祝福」を頂いたというのに、以前の私とそう大差ないということに、ものすごい戸惑いを覚えることがあります。

イエス様を信じたからには、一遍に人を憎む気持ちが無くなったり、食欲が見る見るうちに萎んで行ったり、所有に対する執着よりも分かち合いたいという気持ちが強くなったり、人道的に誰が見ても悪いと思えるようなことに全く関心がなくなり、それらのことがもうこれ以上全く誘惑にならないような、

まあいわゆる、世間一般的にイメージされているクリスチャンらしいクリスチャンと言いましょうか、清く正しい人間のような者になれていないということに戸惑いを覚えます。

依然として、自分の中に罪が住んでいることに戸惑います。

Part One

このような戸惑いは、エペソ書の著者である使徒パウロも覚えました。

ローマ人への手紙 7 : 15 - 24 (パウロ)

このパウロの告白は、キリスト者である使徒パウロの苦悩であると同時に、私たちの苦悩でもあります。

もし人を憎む気持ちが無くなったり、欲望が無くなったり、誘惑に陥ることが無くなることをもってキリスト者だというならば、

偉大な伝道者、説教者、使徒であるパウロのみならず、私たちすべてのキリスト者は、キリスト者と言えなくなってしまう。

なぜならば、誰もが、人道的にも、倫理道德的にも、善悪をわきまえるということにあっても、人の期待値どころか、神が聖書の律法を通して求めておられる水準には、全くもって達していないからです。

キリスト者は、キリスト者でない方たちと、外見的にも、倫理道德的にも、人格的にも、その品性にあっても、何ら変わるところがないように思われます。

クリスチャンでなくても善良な人はたくさんいらっしゃいますし、むしろ、クリスチャンよりも、所謂クリスチャンらしく見えるような方たちもおられます。

では、キリスト者は何が違うのでしょうか？

ローマ書 7：24 で、パウロは自分のことを「本当にみじめな人間だ」と言っていますが、その次の言葉を見てみます。

ローマ人への手紙 7：25 (パウロ)

24 節と 25 節の間に、何が起こったのかは分かりません。

24 節では、「私は本当にみじめな人間です。だれがこの死のからだから、私を救い出してくれるのでしょうか」というほどに、自分のみすぼらしさを痛切に告白しているのに、25 節に入りますと、突然、歓喜の告白が出てきます。

文脈を全く無視したような唐突感しか感じない喜びと感謝の告白が突如として出てきます。

でも、この唐突な歓喜の告白こそ、キリスト者がキリスト者である理由です。

今ここで、パウロは、「この私は、心では神の律法に仕え、肉では罪の律法に仕えているのです」という告白にある通り、パウロ自身の内にある矛盾に対する戸惑いは全くぬぐい切れていませんが、その矛盾した自分自身を開けっぴろげに、むしろ、開き直ったかのように、「主イエス・キリストゆえに、神に感謝します」と言います。

私は、個人的に、このパウロの姿勢を「キリストにある聖なる開き直り」と秘

かに命名しているのですが、実のところ、このパウロの姿勢こそ、キリスト者がキリスト者たる所以です。

つまり、自分の内にある矛盾を、素直に、開けっぴろげに、キリストを通して認められるようになること、これがキリスト者とされた者に現れる大切な霊的症状とも言えるものです。

症状という言葉辞書を調べてみますと、「病気やけがの状態。病気などによる肉体的、精神的な異常」と出てきます。

即ち、すべての霊的祝福を与えられたために目が開かれ、死んでいた我が霊が生き返り、神に対する感覚が戻り、イエス・キリストの十字架が我が罪のためだと分かり、永遠のいのちと天の御国の相続が約束され、

また、神の言葉を聞く耳が開かれたために、自分が罪人であるという罪人としての症状を自分ではっきりと認識出来るようになったということです。

それまでは、罪人ゆえに生じていた多種多様な症状を認識することも出来なければ、はっきりとした自覚症状がないために、永遠の滅びという結末に至ることを避ける余地もありませんでした。

しかし、キリストによって永遠のいのちを与えられ、天に属するものとされたという事実ゆえに、自分が罪人なんだということが、はっきりと分かるようになりました。

使徒パウロの罪に対する葛藤や戸惑いの告白は、キリスト者とされたために生じたものであって、イエス・キリストを受け入れなかった時には、無かった感覚です。

だから、このパウロの突如の歓喜の告白は、したいと願う善を行わないで、したくない悪を行っている矛盾を良しと正当化しているのではなく、

神の前にあってその矛盾を葛藤し、戸惑ってはいるけれども、その葛藤や戸惑いを遥かに勝るすべての霊的祝福を頂いているという、何もかも超越した恵みに対する喜びが噴き出るかのように出て来た告白です。

どんなにその戸惑いや葛藤が深くても、金輪際、その戸惑いや葛藤の原因である罪をもってして、パウロを永遠の滅びに落とし入れることは出来ないどころか、

むしろ、その葛藤と戸惑いが深ければ深いほど、キリストによって与えられた天上のすべての霊的祝福ゆえに、感謝が深まっていきます。

実のところ、この自分の内に混在している善と悪、神の律法と罪の律法、霊的なものと肉的なものという“戸惑い”こそ、私たち信仰者が信仰者とされた最も大事なしだと、証拠だということをパウロは勇気ある開けっぴろげな告白をもって示してくれているんです。

このパウロの正直なぶっちゃけに、2000年間、どれだけ多くの人が救われ、慰められ、励まされてきたことかと想像しますし、私自身も何度も救われましたし、励まされましたし、却ってこの戸惑いと葛藤ゆえに、自分自身に起こった救いの確実性に立つことが出来ています。

Part Two

私たちは、人の考える常識や倫理道徳感に立脚し基準をもって、「クリスチャンらしくない」という言葉や思いを、自分や人に安易に用いてしまうことがありますが、

パウロの告白は、私たちキリスト者は、先ず一義的に、倫理道徳的な行いや人間としての品性やその人格で量られる存在ではないということを教えてくれます。

逆に、その内面に、イエス・キリストゆえの罪に対する戸惑いがあるのかということで、量られる存在です。

つまり、キリストを信じる前までは、眠っていて作動していなかった、人の前ではなく、神の前にある良心のエンジンに火が灯り、罪に対する戸惑いと葛藤が生じるようになったのか、なっていないのかということが大事だということです。

この罪に対する戸惑いと葛藤が、私たちキリスト者がキリスト者とされたということを確認させるわけです。

もちろん、だからと言って、罪を犯すことにもうこれ以上抗わなくてもいいとか、良い行いを諦めてもいいとか、そんなものには関心を寄せる必要もないという意味ではありません。

キリストを通して、神に感謝する者は、たとえ自ら良い行いをしたくなくても、良い行いをしたいという思いが、以前の自分とは全く違う次元で湧き上がって来ますし、その湧き上がってくる思いと罪との戦いゆえに、戸惑いと葛藤をしながらも、私たちは良い行いをする方へと導かれて行きます。

エペソ2：10にある通りですね。

エペソ人への手紙2：10（パウロ）

私たちの良い行いは、私たちが善良だから出来るのではなく、私たちが行う良

い行いさえも、神によって備えられるのであり、自分の行いの自画自賛にさえも違和感を覚える者とされたということです。

だから、安心して、戸惑い、悩み、葛藤出来るんです。

私たちの葛藤や戸惑いは、それまでしてこなかった霊的戦いですし、この戸惑いや葛藤こそ、私たちがキリスト者とされた最も分かりやすいしるしです。

だから安心してください。

「それでも、あなたクリスチャン？」という言葉や、「それでも、僕は、私はクリスチャンなのか？」という心の言葉で、私たちがクリスチャンではないということにはなりません。

却って、そういう言葉が出てくることこそ、「今、私はクリスチャンである」という証しです。

以前の私には、「それでも、あなたクリスチャン？」とか、「それでも、私はクリスチャンなのか？」なんていう受けた祝福ゆえに生じる疑いとは、縁遠いところを生きていました。

でも今私たちは、天上のすべての霊的祝福に入れられて、天に属する者とされ、キリストのからだとして愛のうちに建て上げられる神のご計画の実行の中にある者とされました。

人は、人の義とか、自分の義によって、プライドや損得勘定で物事を判断しようとするので、「あなたはなっていない」と直ぐに結論を下しがちですが、私たちは、神の義によって永遠のいのちの種が植えられて、その植えられたいのちの種が成長するという過程の中で、生かされています。

「こんな私が・・・」という自己卑下や、または、「この私が！」という見栄から救い出され、イエス・キリストのいのちの種が植えられ、その植えられた命の種が成長する恵みに与っているんだと、

胸を張って、堂々と、「こんな私だからこそ、僕だからこそ、クリスチャンなんだ！」と言っているんです。

私自身も、「え、あなた牧師?!」なんていう風に思われたこと数知れずですが、その度毎に、「はい、牧師です!」とはっきりと言います。

なぜなら、私という人が清く正しくて牧師をやっているわけではなく、イエス様の哀れみと慈しみゆえに牧師という最高の恵みに与っているわけですから、イエス様ゆえに、堂々と胸張って、「うん、俺牧師!」と言うだけです。

Part Three

いのちは時間をかけて成長するものです。

だからクリスチャンを、自動販売機に100円玉入れてボタンを押したら、完璧に冷えたコーラが出て来ましてなんていう風に、「イエス様信じてクリスチャンになったら、完成した人格と品性を持ち合わせるようになりました」なんていう感じで、機械的に、クリスチャンらしさを始めから人に求めて評価することは大いなる間違いですし、誤解です。

確かに、変化は起こっています。

でも、その変化には、時間が掛かるんです。

木の種をご覧になったことがあるでしょうか？

大概の木の種は、米粒大か、それ以下の大きさしかありません。

なので、その小さな種が地面に植えられても、種が植えられていない地面との見た目は全く変わりません。

どこに植えられているのかさえ、分かりません。

でも、確かに一方の土地には種が植えられ、もう一方の土地には種が植えられていないんです。

でも時間が経てば経つほどに、そこには大きな違いが出てきます。

種が芽を出し、芽が成長し、背丈が伸びて、葉を広げ、やがて花を咲かせ、実りを実らせます。

その木陰で憩うものもあれば、その実を食べていのちを繋ぐものもあり、水を貯え、澄んだ空気を作り出し、その土地にあってなくてはならない生態系を保つ存在となっていきます。

しかも樹齢100年以上の木なんてざらにあります。

樹齢1000年、2000年という木もありますし、世界で一番大きい木と言われるジャイアントセコイアの木を見に行ったことがあります。樹齢2200年、高さ84m、重さ1900トンにもなる木で、本当に美しいんです。

なぜこうなれたのかと言いますと、最初に、種が土地にしっかりと蒔かれ、植えられたからです。

その小さな種はとても小さいですが、命なので、確かに成長します。

時間はかかるかもしれませんが、確かに成長します。

その成長過程には、枯れてしまいそうな日照りもあり、根っこから倒れてしまいそうな強風もあり、山火事もあり、流されてしまうほどの大雨もあり、病もあります。もちろん、さわやかな秋晴れもあり、小春日和もあります。

また、木の種類によって、成長速度も違えば、大きさや葉の色、花の色も違います。

でも、地面にしっかりと植えられた種は、どこに種が植えられたのかもわからないようなところから、誰が見ても美しい木だと分かるように成長していきます。

イエス・キリストにあるいのちも、時間をかけて成長していきます。

日照りもあれば、水不足もあり、強風もあり、時には秋晴れ、また時には小春日和を経験しながら、確かに成長していきます。

Part Four

ピリピ人への手紙 1 : 3 - 6 (パウロ)

私たちの内にイエス・キリストによるいのちの種を植え、ことを始めなされた神様は、ご自分が満足されるところまで、喜ばれるところまで、成長させ、完成させてくださいます。

完成するかどうかかわからないところを歩ませられているのではなく、完成することがすでに決まっているその過程を導き、歩ませられています。

そして、神の時に、綺麗な花を咲かせ、豊かな実りを神と共に喜び、神をほめたたえるようになることがすでに決まっているところを生かされているのが、天上のすべての霊的祝福を受けた私たちキリストにある聖徒たちです。

キリスト者であることを理由に囚人となり、牢に入れられているパウロが、私たちに教えてくれる霊的視点は、勝ちがもうすでに決まっているサッカーの試合のビデオを見るような視点です。

そのビデオの中で、応援しているチームがどんなにオウンゴール自殺点を入られたとしても、自分のチームに退場者が出て、終始劣勢を強いられていたとしても、最後に勝つという結果を知って見ていますので、ピンチ度合が深刻であればあるほどに感慨深いですし、平安と安心の内にそのサッカーの試合のビデオを見ることが出来ます。

今牢屋に入れられていようが、叩かれようが、寂しかろうが、貧しかろうが、もちろん、痛く、辛く、苦しさを感じはしますが、キリストにあって勝利しているという事実揺るぎはないという視点で、私たちはキリストにあって生きられるんです。

だから、パウロはこんなことを言うのです。

ピリピ人への手紙 4 : 11 - 14 (パウロ)

苦難や戸惑いや葛藤が深ければ深いほどに、キリストにあるすべての霊的祝福が浮き彫りになりますし、神に近づいていきますし、神に叫ぶように祈りますし、神に頼りますし、神から目を離せなくなります。

Conclusion

最後にもう一箇所だけ、聖書箇所を見てみたいと思います。

創世記 17 : 1 - 8 (パワポ)

アブラハムは、神様から、「わたしはあなたを祝福し、あなたを通して、またあなたの子を通してこの地上のすべての人々を祝福する。

あなたは星の数ほどの、海の砂の数ほどの人々の父となる」という約束を、この 17 章の内容に入る何十年も前にいただきました。

しかし、その神からの約束を期待しながら、信じて待つことが出来ず、自分の女奴隷との間に子をもうけ、自分の思いや自分の計画や自分の力によって設けたその子を通して、神様はことをなさると言い張る大失態、大失敗、不信仰を犯しました。

そんなアブラハムに神様が現れておっしゃったのが、今読みました創世記 17 章の言葉です。

なんておっしゃっていますか？

「わたしは全能の神である。あなたの大失態や大失敗や不信仰によって、わたしが立てた計画と約束が取り消されることもなければ、妨害されることもない。

全能で神であるわたしは、当初の予定通り、わたしがあなたに与える子を通して人々を祝福し、わたしが与える子を通して、海辺の砂、空の星ほどの子孫をあなたに与え、あなたにわたしが全能の神であることを実現させてあげよう」とおっしゃいます。

事実、この後、100歳になったアブラハムに息子イサクが与えられ、そこからダビデが生まれ、イエス・キリストがお生まれになって、イエス・キリストを信じ、アブラハムを霊的父とする者たちが、海辺の砂、天の星のように数えきれないほどの子が与えられ、祝福を頂きました。

そしてさらに、アブラハムの霊的子孫となった私たちキリストにある聖徒たちにも、「わたしは全能の神である。あなたの大失態や大失敗や不信仰によって、わたしが立てた計画と約束が取り消されることもなければ、妨害されることもない。

あなたの受ける苦難が悲劇で終わることもなければ、必ずや、聖なる、傷ひと

つも、しわもしみもない者として、キリスト・イエスにあって定められているその日に、栄光の存在として立たせる」と約束してくださっています。

だから、私たちは、賛美せずにはられません。

だから、私たちは、私たち自身にも、人に対してもせっかちになる必要はありません。

神が成し遂げてくださいます。

お祈りいたします。

祝祷：ピリピ人への手紙 1：6